

右舷灯

久しぶりに大型船の進水式を見ることができた。船は阪九フェリーの大型カーフェリーで、進水式は下関の三菱造船であった。

同造船所は進水式に一般見学者も広く受け入れていて、開門時間の30分ほど前に到着したが、すでに長蛇の列ができていた。門が開き、進水台横の観覧場所に誘導され

た。目の前には巨大なバルバスバウが見え、船体が壁のように立ちほだかっていた。この進水式には地元の幼稚園児がたくさん招待され、また大阪方面から阪九フェリーの「やまと」に乗船して進水式を見学するツアーも組まれていて、なかなかの盛りぶりだった。

式典は、国歌斉唱の後、命名

式が行われ、紅白の幕で覆われていた船名が現れた。その名は「やまと」!! 現在、神戸へ新門司間に就航している船と同じ名前を引き継ぐことになった。

命名の後、進水台のまわりがにわかには忙しくなる。船体の支えがすべて取り除かれ、船体重量が進水台に乗ると、滑り降りるのを留めているのはトリガー

やまと進水

だけの状態となる。そして進水作業の完了を知らせる号鐘が鳴り響き、いよいよ支綱切断だ。船首ではシャンパンの瓶が打ち

た。この後、艀装岸壁で内装工事が行われ、約半年後には処女航海を迎えることとなる。

かつては、進水式では進水絵葉書が配られたが、今はなくなった。これは専門の画家が、設計図を頼りに完成後の雄姿を描いた絵を葉書にしたもの。船にちなんだ表紙や主要目などもついていて、それを集める収集家

も多かった。最近では設計のデジタル化が進んで、設計図から船の鳥瞰図を描くこ

とも容易となり、外観のカラリング決定にも使われているので、画家に依頼しなくても絵が描ける。さらにカラー印刷も安価になってきているので、ぜひ進水絵葉書の復活を期待したい。生まれたばかりの船の活躍ぶりを想像できる格好の記念品となる

2代目「やまと」は洋上に浮か

んだ。まさに感動の一瞬であった。

(池田良穂)